The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	不可能への言及 ： 記憶の心的述語の記述的検討
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 94-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

不可能への言及
―記憶の心的述語の記述的検討―

千々岩　宏晃

1. 問題意識

国会中継などで不正を追及された政治家が「記憶にありません」と言う姿を見るとき、不信感を抱いた経験はないだろうか。しかし、では、仮に記憶が脳内で起こる神経伝達であるとすると、それは私秘的なものであり、「疑う」という基準で判断できるものではないはずだが、ではなぜわれわれは「疑う」ことができるのだろう。

Lynch and Bogen (2005)は、イラク侵攻に関する公聴会を題材にしながら、その問いに対して、「社会的規範」によって説明している。重要な決定にかかわった人がそれを忘れるのは「おかしい」という規範(常識)が適用される以上、記憶は私的ではなく、社会的に開かれた公的な概念であるはずなのだ(cf. 浦野 1999)。

では、国会のような制度的な場面ではなく、日常場面では、記憶はどのように扱われているのか。本稿ではまず、先行研究を参照し、上記の規範以外に、記憶がどのような概念とかかわりがあるのかを概観する。その後、「記憶がある」「覚える」「忘れる」「頭に入る」など、記憶にまつわる語や表現(これらを「記憶にかかわる心的述語」と呼ぶ)を対象に、会話分析の手法を用いて分析を行うことで、特に「能力」概念、その中でも「不可能」の概念にかかわる断片について、その行為を分析、分類、記述する。

2. 先行研究

本節では、記憶概念に対する社会学的アプローチを行っている研究を概観し、記憶が関わる他の概念をリスト化する。

記憶等のいわゆる“心的現象”をいかに社会学的なアプローチによって記述するかは、Coulter(1979=1998)をはじめとするエスノメソドロジストらによって、他の概念との結びつき[1]を考察する形で試みられてきた。

Coulter は、「思い出す、覚えている」というのは、まずは他者らによって反駁、反論可能な取り消し可能な達成成果だ[2]と述べている。また、それ自体は行為ではなく、単純に心的過程であるわけではない、とも述べている。

また、前田(2008)は「民間心理学」的にとらえられている「何からのイメージが意識に現れること」という心理的記述のみを、「思い出す」「覚えている」ということの唯一の基準=記述とすることは、多様な記憶の概念の、他の概念との結びつきを埋没させてしまうという(前田 2008, p.143)。

では、他の概念との結びつきにはどのようなものがあるのか。これまでの研究では、記

憶の概念が他の概念と多種多様に結びつくことが分かっている。なお*印の用語と発話例[3]は、引用者がリスト化のために適宜追加したものである。

1. ある項目を習得して、それを忘れていないこと(学習: Ryle 1949)　(作例:私はビルマ語をまだ少しは覚えている)
2. ある項目を過去に経験したことがあること(経験: Hacking 1995, 浦野 2007)　(作例:私は 5 歳の時滑り台から落ちた時のことを鮮明に覚えている。)
3. ある項目について語りうること(能力とメンバーシップ・カテゴリー：西阪 2001、 前田 2008)　(作例:私もその映画、覚えてる．面白かったよね。)
4. ある項目を忘れたからと言って、その知識を持っている主張自体が否定されることはないこと(知識のネットワーク性*：Coulter 1979)　(作例:彼女の名前は忘れてしまったけど、確かに会ったことがある。)
5. 社会的規範によって想起/忘却するべきことが期待されていること(規範性*：Coulter 1979, Lynch and Bogen 2005)　(作例:記憶にありません。)
6. ある項目を知っていれば、他の項目も知っていると思われる場合(全体-部分性*：Coulter 1979)　(作例:双子葉類と単子葉類があることを覚えている。だから、私は中学生理科ぐらいは覚えてる。)
7. ある項目を知っていても、他の項目を知っているとは思われない場合(孤立性*：Coulter 1979)　(作例:どうやってエンジンが動くかを覚えてるからと言って、彼に車の修理をすべて任せるわけにはいかない。)

ただし、これら概念は恒久的な記憶の性質ではなく、相互行為のその場において、局所的に指向・達成されること(浦野 1999)も指摘しておかなければならない。

現在に至るまで、日常会話における、記憶にかかわる心的述語を用いたやり取りは、あまり研究されてこなかった。本稿では、実際の日常会話のデータを会話分析のやり方を用いて、項目 3 の(不可能の)能力帰属が問題となる場面でどのような行為が行われているのか、の記述を行う。

3. データ概要と分析方法

本稿で分析に利用したデータは、CallFriend コーパスにおける電話会話データ(約 25 時間分 MacWhinney 2007)、および著者が採収した会話データ(約 6 時間分)である。

本研究では、これらデータを文字起こし[4]したのち、「覚える」「忘れる」「頭に入っている」等の記憶にかかわる語/表現を含む会話を抽出(以下、断片)した(計 117 例)。その後、それぞれの断片に対して、連鎖組織に合わせ行為の記述を行った。そこから、記憶が能力の概念とが結びついていると考えられる断片を集めた(計 37 例)。

4. 分析と結果

本節では、まず、分析の結果を述べた後に、個別のデータを参照しながら、なぜそのような結果に至ったのかを記述する。分析の結果、能力帰属をおこなう行為は、誰の能力について述べているかで大きく 2 分されることが分かった。各節に分けて、それぞれ分析、結果を述べる。

4-1. 話し手の能力の欠如への言及

まず、自らの能力の欠如について述べている断片の分析を行う。これら断片では、通常連鎖は以下のようになる。

01　A: 知識や経験を主張するような【情報提供】
02　B: 【確認要求】や【継続支持】など 01 を元にした連鎖継続の期待
03　A: 主張は続けながら、しかし語ることができないことを示す【弁解】と連鎖の解消

以下に観察する断片には動詞「忘れる」に非意図を表す「てしまう」がつき、下降調のイントネーションを伴った「けど.」で TCU (turn-construction unit)を閉じていた。

前田(2008)にのっとれば、このような場面での能力の欠如の表明は、「私は語ることができない」という「語れる人-語れない人」のメンバーシップ・カテゴリーの実践であるといえる。しかし、分析の結果、自らの能力の欠如について述べる場合において、話し手は「忘れた」ということで、本来はその能力があることを示すことで主張の前提を確保しながら、同時に、聞き手から期待される連鎖を解消していた。以下、実際の断片を検討をしていく。

まず断片 1 を考察する。ターゲットラインは 012 行目である。

断片1.　　CallFriend japn6166 [名前忘れちゃったけど]

((Okm が寝ていると、この録音プログラムに登録しないかと勧誘の電話が知らない女の子からかかってきた。起こされたので、適当に返事をすると、その女の子が Okm をレジスト＝登録した、という経緯が語られている。))

[00h:00m:32s]

004	Okm:	¥「じゃ(h)あもうレジストしときます」とかいって.¥	【語り】
005	Shin:	かわいい女の子だったよ¥なんか.¥	【情報提供】
006		(0.5)	
007	Okm:	hhhhh huhhh　¥それはわからねえけど.¥ (.)	【情報提供】
008	Okm:	[.hhh	
009	Shin:	[俺の時はぁ.	【情報提供】

```
010   Okm:    >あぁそうなの?<                              【確認要求】
011           (0.4)
→012 Shin:    [名前忘れちゃったけど.                       【弁解】
013   Okm:    [hhh ((鼻息))
014   Okm:    .hh  .hhhhh[hhh
015   Shin:              [うぅん.                          【反応要求】
016   Okm:    まぁ::ったくねぇ::. hhh hhh[hhhhhhhhhh       【反応】
017   Shin:                             [°うぅん.°         【反応】
018   Shin:   シンディーとかそんな名前だったと              【情報提供】
019   Okm:    HEHAHAHA[HA!                                  【情報受理】
020   Shin:         [¥ええ?¥                                【修復要求】
021   Okm:    .hhh huhhh! .hhhhhhh まぁじでも眠たかったよあの
022   Okm:    ときゃあ.((あの時＝001 行目,興味があるか聞かれたとき))
```

ターゲットラインまでの発話は、以下のような分析が可能である。

004 行目：録音プログラムに至った経緯が話されてる。

005 行目：Shin が、勧誘担当の女の子に会った時のことを話し、【情報提供】をする

007 行目：Okm が 005 行目を【同意要求】と誤解。同意も反対もできないと述べる。

009 行目：700 行目の誤解が、追加の【情報提供】で解かれる。

010 行目：かわいいかどうかが【確認要求】される。

さて、010 行目の Okm の【確認要求】に対する 011 行目の沈黙、012 行目のターゲットラインの返答は、要求されている【確認与え】とは聞き取れない。また、発話末の「けど」は、012 行目の発話が 005、009 行目の発話に付け足されたことをマークする連続子の一種(西阪 2005)である。直前の発話に反応せず、009 行目に付け加えることで、010 行目 Okm の【確認要求】に取り合わない発話デザインになっている。

では、012 行目で「忘れてしまった」という相互行為上の合理的理由とはなにか。Okm が直前で確認したことは「そうな(=かわいい女の子だった)の？」という【確認】であり、名前覚えているかどうかの確認ではない。また、上で見たように Shin はそれに取り合っていないことからも、その前に行った自らの行為(=005 行目の【評価】)に対して、何らかの補足をしているといえるだろう。

仮に単に「女の子の名前が重要ではないから忘れてしまったのだ」というのであれば、それは逆に「なぜこの場所で Shin がそのことを述べる必要があるのか」という合理的理由を提供できなくなってしまう。なぜなら、さほど重要でないならば、012 行目で Shin はこの発話をしない=補足しない、という選択も持ち合わせていたからである。ここで「忘れてしまった」ことを述べるには、やはり局所的な理由が必要である。

まず、012 行目の発話から、Shin に何か/誰かを評価する際に名前を示せるなら示せ、という規範(第 2 節の項目 5)があることを示している。確かに、例えば、ある俳優の顔が

好みだというときには、その俳優の名前を導入したり参照したりして示そうとするだろう。一方、「ある俳優」「名前は知らないけどあの人」などの指示表現を使えば、なにかを隠している、とか、本当に好きなのだろうか、と勘ぐられてしまうかもしれない。

以上から、ここでの補足は、名前を語ることができないという Shin 自らの能力の欠如を示しながら、しかしその女の子のかわいさを評価できることと、その前提を示すことができないことへの【弁解】を行っているように聞かれうる。確かに、第 2 節で触れた「知識のネットワーク性」の観点から言えば、名前を忘れたことは、その人にあったことがないことを意味しない。Shin はここで、女の子を見たことがある経験を主張しながら、同時に、“本来は”名前を示しながら評価を行うことができるのだ[5]という、005 行目の「評価」の前提の主張をしているのである[6]。

以上の分析から、この断片において、012 行目で Shin は、【弁解】を行っていることが明らかになった。この【弁解】は、まず、010 行目の Okm からの【確認要求】における連鎖的期待を解消するものとしてデザインされていた。さらに、Shin が Okm と共有していると考えていた、「かわいいと評価する女の子の名前は覚えているべきことである」という規範に沿っていないことを自ら表明すると同時に、主張の前提の経験は崩さない手立てになっていた。

次の断片 2 のターゲットライン 071 行目も、「主張の前提」を保ちながら、「連鎖解消」を行っている。

断片2.　　CallFriend japn6742 [すっごい昔だから¥忘れてしまったけど¥]

((二人は映画を見に行こうとしているが、何を見るかは決まっていない。この直前、L が候補を提案するが、R は乗り気ではない。))

```
000   Lily:   なんか見たいのあるぅ？            00h:10m:49s   【情報要求】
001           (0.4)
002   Rick:   あのセブリナ7ぁ？  ((Sebrina とつづる))          【情報提示】
003           (0.5)
004   Lily:   あぁ!.hh[hhh サ↑ブ↑リ↑ナ↑い↑い↑ね↑ぇ!          【同意】
((54 行省略：主演者などについて話し，鑑賞する映画館の場所が話される.))
059   Lily:   そっかぁ.サブリナかぁ::::.                        【前置き?】
060           (0.3)
061   Rick:   うぅ::ん_                                          【受け取り】
062   Lily:   あれ見たぁ::?(0.3)オードリーヘップバーンの        【前置き?-
063           サブリナ.                                           情報要求】
064   Rick:   見てなぁ::い.                    00h:11m:46s       【情報提供】
065           (0.4)
066   Rick:   hhuhh  .hhhh
067           (0.2)
```

```
 068   Lily:  私-一回みたんだけどねぇ,                          【前置き?】
 069   Rick:  うぅ::ん.                                         【継続支持】
 070          (0.6)
→071   Lily:  もうなんかぁ,すっごい昔だから¥忘れてしまったけど¥  【弁解】
 072          (0.4)
 073   Rick:  [あぁ::::ん_                                      【理解】
 074   Lily:  [ほとんどぉ.                                      【情報追加】
 075          (0.3)
 076   Lily:  でもあのぉサブリナ::パンツは¥あれから来たん¥
 077          ¥だからぁ.¥                                      【情報提供】
 078   Rick:  あぁあぁそうなんだぁ:::.                          【受け取り】
((サブリナパンツの話が少しなされ、そのあと他の映画館の候補が話される))
```

この断片では、二人が休日を過ごす方法について話し合っている。000 行目から 058 行目で、一通り映画「サブリナ」が候補として上がり、見る映画館の話もなされる。

しかし、059 行目は、この後いくつかの可能性が含まれる曖昧な発話であるように聞かれうる。「サブリナというアイデアは意外だった」というような感嘆をしているかもしれないし、あるいは「やっぱりサブリナにも乗り気じゃないな」というようにも聞かれうる。実際に、061 行目で Rick は相手の発話を単に【受け取】っている。

その後の 062 行目は、リメイク前の作品を見たか、という【情報要求】である。これも何らかの「前置き」にも聞かれうるだろう。例えば、「同じストーリーなら別の映画にしない?」というサブリナの【拒否】と【提案】が来るかもしれないし、「すっごい面白かったよ」のような【評価】かもしれない。その意味で、059 行目の曖昧さとも合わせて、どのような方向で会話が進むのかが分かりにくい状況であると考えられる。実際に、Rick はそれを【情報提供】と聞き、ひとまず「見てな::い」と答えている。

その点からいって、068 行目以降は、Lily がその「前置き」(らしきもの)で何を投射していたのかが明示される場面であるが、068 行目で「一回見た」経験を述べている。誰かが 1 回何かを見たことがあることをいうとき、その次に来るのは「感想」などの何か【評価】するような前置きが行うはずだった“肝心の”発話が来るように思われる。Lily 自身も、発話を継続調で話すことによって、続けることを指向し、Rick はその継続を支持=要求している。

しかし、その 071 行目で Lily は「忘れてしまった」ことを述べている。これは「前置き」された行為ではないだろう。つまり、Lily が忘れたことをわざわざ言うために前置きしたとは考えられない。ゆえに、「忘れてしまった」ということは、Lily にとって【評価】などの投射した行為を解消する役割を担っている。

しかし同時に第 2 節で触れた「知識のネットワーク性」の観点から言えば、映画の内容を忘れたということは、映画を見たことを忘れたことを意味しない。その意味で、「1 回

見たこと」の「経験」を主張しながら、しかし映画を「評価」するほどの情報を持ち合わせていないことへの【弁解】という行為を行っているといえる。074 行目で追加された「ほとんど」も、「忘れていないこともある」ことを含んだ言い方で、やはり「経験」を主張しているように聞かれうる。

ただし、Rick は 075 行目の沈黙で Lily の話の続きを待っているように見える。それに対する 076 行目は、「サブリナ」の内容や評価ではなく、映画が社会に与えた影響の【情報提供】になっている。そのため、平易であることを承知で言えば「とにかく価値のありそうなことを伝えてなんとかその場をしのいでいる」といえるかもしれない。

以上から、071 行目で Lily は、「前置き」から投射された連鎖と、聞き手 Rick から求めらている【評価】等の行為への期待を、「経験」したことは主張しつつ解消しているといえるのである。

以上の二つの断片をまとめよう。これら断片では、「忘れた」ということは、自らの評価や経験を本来は語ることができる、という主張をつづけながら、しかし同時に聞き手からの連鎖的要請を解消できるという、2 つの仕事を一度に行うための指し手として用いられていた。仮に断片 1 であれば「A：かわいい子だったよ。→B：そうなの?→A：わからない」や、断片 2 が「A：私 1 回見たんだけどね→A：やっぱりわからない」のような解消の方法を行えば、主張の前提が崩れてしまうだろう。

4-2. 相手の能力の欠如への言及

次に、話し手が記憶にまつわる語・表現を用いて、相手の能力の欠如について話す場合の分析を行う。

これら断片では、記憶にかかわる心的述語は相手の可能性に言及=帰属することで、【非難】や【指摘】等の行為が本来持つ反同調的(dis-affiliative)な性質を際立たせない指し手になっていた。「あなたは本来できる人だ」ということで、相手の能力の欠如に焦点を当てるのではなく、その裏にある可能性に指向しながら【非難】や【指摘】を行う断片であるといえる。共通の連鎖は、おおむね以下のようになる。

01　A:　能力欠如が明らかになる【語り】等
02　B:　記憶にかかわる心的述語を用いて、規範に対する違反を【非難】・【指摘】
03　A:　【理解】【受け取り】等

断片3.　　CallFriend japn6765 [頭なんか入るわけないじゃあん]

((Lan は学休期で暇で、午前 2 時に眠るような生活をしているという。Ree はそれに対して、今から規則正しい生活に直しておかなければ、8 時から始まるメディカルの授業で苦労するぞ、と注意している。))

```
000    Lan:   うぅ:::[ん.                                  00h:09m:01s
001    Ree:          [だって今のまんまの状態でメディカルでぇ:::
002    Ree:   .hhhh やったとしてもぉ,[いっつもぉ午前中は
003    Lan:                         [° うん.°
004    Ree:   眠い状態でやってるわけだよぉ.                【非難】
005    Lan:   ねぇ_                                       【同意】
006           (0.5)
007    Lan:   ¥そだねぇ.¥=                               【同意】
→008   Ree:   =頭なんか入るわけないじゃあん.              【非難】
009           (0.5)
010    Lan:   そうだ-だからぁ,  [.hhhh                    【確認与え】
011    Ree:                     [.hhhh
012           (.)
013    Lan:   だからいっつもだからそういうスケジュールのときはぁ
014           入ってなかったの頭に.(0.3)全然.[8]           【確認与え】
015           (0.3)
016    Ree:   うぅ:::ん_                                  【理解】
017           (0.3)
018    Lan:   [うん.
019    Ree:   [んで授業いっても寝てたんだろうぅ?            【非難のやり直し】
020    Lan:   うぅんだってぇ:::¥眠いんだもん.¥ huhu
021    Lan:   [.hhhh huhu
022    Ree:   [.hhhh huhu  ¥「だって眠いんだもん」って¥
023    Ree:   ¥言い訳になってないよ.¥
024    Lan:   ¥ははだって眠いんだもんでも.¥
```

この断片 3 では、「頭に入る」という記憶の比喩表現が用いられている。一見して、これが「学習(メディカルでの学習がおぼつかなくなってしまうこと)」や「能力(メディカルの学習が不能に陥る可能性があること)」に関わる表現であるという予測が立てられる。

しかし一方で、行っている行為を見れば、それが【非難】であることもわかるだろう。

実際に Lan は 010-014 行目で、非難を【確認要求】として聞き、【確認与え】することで自らを客観視して非難に対処しているように聞かれうる。さらに、019 行目で非難のやり直しを行っていること、また、020 行目を 023 行目で「言い訳になっていない」と述べること、発話末の「ジャン」(千々岩 2015)、Ree の 008 行目を、Lan が非難として聞いたこととしていることを前提にしていることからも、このことは参与者によって指向されているといえるだろう。

では、なにを【非難】しているのか。ここで「頭になんか入るわけない」というのは、Lan の学習能力の欠如について述べるのではなく、Lan が持っていて当然の規範が欠如し

ていること(早く寝なければ勉強に支障が出ること)を非難している。これは逆説的に考えれば、彼女の学習能力そのものに対する【非難】ではなく、彼女が本来学習能力を持っていることも表している。

一方で Ree は、この発話を単に事実の【確認要求】として聞いている。ゆえに 008 行目を「実際に学習できていないだろうという【確認要求】」、それに対する 010-014 行目を「確か学習できていない【確認】」というような確認のやり取りとして聞くことによって、規範の有無として聞かないことで、規範自体は持ち合わせていることを相手に主張している。

断片4.　CallFriend japn6414 [やぁねぇもう忘れないでよぉ]

((Rka と Lon は友人同士。Rka は今年 4 月あたりに出産した母で、Lon は来年出産予定で現在妊婦。Rka がアメリカでも出産予定日を教えてくれるのか、と問い、Lon が来年 3 月であると述べる。))

```
000   Rka:   あぁでもそし-あぁそうかぁ:::あたしがねぇ最初ねぇ:::,   【前置き?】
001          (0.3)                                  00h:23m:29s
002   Lon:   うん.=                        ((修三＝Rka の息子))
003   Rka:   =修三が動いたの感じたのが１月だったと思うからぁ::,     【前置き?】
004   Lon:   えぇそれは遅いよ!ヤエ-  .hhhh°やっ[ちん°.             【指摘】
005   Rka:                                       [あれ違っ↑たか
006   Rka:   なぁ::::::[その後だったかな::::::[[::                  【説明要求】
007   Lon:             [gohon!  ((咳払い))    [[だってねどの本
008          見たってねぇ,                                           【根拠説明】
009   Rka:   uhuhu!
010   Lon:   ¥どの本見た[ってねぇ¥                                  【根拠説明】
011   Rka:               [.hhhh ¥うぅ:::ん_¥
012   Lon:   <もうねぇ五か月目かなぁ>.                              【根拠説明】
013   Rka:   うぅ:::ん.
014   Lon:   2↑0↑週↑目↑ぐ↑ら↑い::にはぁ::もう
015          [みんなぁ-すこし-しょうな-.hhh[(.)¥大なり¥            【根拠説明】
016   Rka:   [うん.                          [.hhh
017   Lon:   ¥小なり感じますってかいて[ある.¥                      【根拠説明】
018   Rka:                            [¥あぁそっか!¥                【理解】
019   Lon:   .hhhh 2↑0↑週↑目ってったら五か[月かなぁ.                【確認要求】
020   Rka:                                 [.hhhh¥そう
021          かぁ!¥(0.3)¥もう[なん::か°もう°昔のことみたい          【確認】
022   Lon:                   [うぅん.
023   Rka:   になっちゃった¥hahaha!=                                【意見提示】
→024  Lon:   =おぉおおぉおお:::ん  ¥や hah ぁねぇもう忘れない¥      【指摘】
025          ¥でよぉ[hoh!¥
```

```
026   Rka:          [.hhhhh
027   Lon:   .hhhhhh[↑さ↑い↑き↑ん↑の↑は↑な↑し↑で↑す.      【指摘】
028   Rka:          [°¥あぁそう-¥°                        【理解】
029          あぁそっかぁ::::[::::::                      【理解】
((Lon は「でも」といい、Rka のように,妊娠していた時期のことを忘れた知り合いと
話したことを語る。))
```

この断片 4 では、妊娠を経験したことのある Rka が、自分の妊娠時のことを下地にして、何かを語ろうとしていることが分かる(000-003 行目)。

024-025 行目の「やぁねぇもう忘れないでよお」は¥で囲って示したように、冗談めかしたような調子で発話されながら、しかし相手の前置きで語られた内容、そして出産について忘れてしまったということを【指摘】していると言っていいだろう。

また、もう一つの特徴として、この【指摘】の背後には、「約 1 年前の出産についてだったら、母であればその経験を忘れるはずはないだろう」という規範、あるいは期待が存在する。それを、過去に妊娠していた先輩ママである Rka と、現在妊娠中の後輩ママである Lon との成員性における期待であると言ってもよい。

そもそも、Rka は 022-023 行目ですでに、その規範/期待に指向している。Rka は、「すっごい昔のことみたいになっちゃった」ということで、「本来は昔のことではない」ために、「きちんと幼児の胎動を感じた時期を語ることができるはずだ」という能力可能を前提としているのである。その意味で、Rka は本来その可能性を持っている人間として、自らを取り扱っている。同様に、024-025 行目の Lon の【指摘】は、それは自然に発生する心的な忘却現象ではなく、意志によって操作可能な能力として記憶を取り扱っている。

このように考えると、その前提により、Rka にはその記憶操作の能力がある=胎動を感じた時期を語ろうと思えば語ることができる、という、能力可能の前提を踏襲した発話になっている。

【指摘】の行為はともすれば相手に反-同調するような行為である。しかしここで Lon は、相手の能力が本来存在することを、記憶の心的述語を発話デザインに組み込むことによって、反-同調のように聞かれないように組み立てている。記憶の心的述語は、その資源となっているといえる。

5. 結論

本稿では、「記憶」が社会に開かれた公的な存在であるという立場で、特に能力にかかわる記憶にまつわる心的述語が、日常場面でどのような行為を構成するかを、類似した例を分析しながら述べた。以下、各断片を再度まとめて述べる。

まず、「自らの(語る)能力の欠如に関する断片」では、記憶にかかわる動詞「忘れる」を用いることによって、①自らの評価や経験を語ることができるという主張の前提を覆さ

ないまま、しかし同時に②聞き手からの連鎖的要請を解消することができるという【弁解】の行為をしていた。

このような断片では、「ある項目を忘れたからといって、その知識の主張全体が否定されるわけではない」という知識のネットワーク性がレリヴァントに働いていた。もともとの主張を崩さないでおきながら、しかし同時に連鎖を解消するという、きわめて繊細な指し手として用いられている。

次に、「相手の能力の欠如に関する断片」では、記憶にまつわる心的述語「頭に入る」「忘れる」が①【指摘】や【非難】として用いられていた。これらは、相手の能力の欠如を明示するような「反同調的」行為であるように見られやすいが、同時に、②相手がその能力を“本来は”持っているはずであるという期待にも触れていた。断片 3 ではそれが(生活態度ではなく)「学習能力」であり、断片 4 ではそれが「妊娠時を語ることができる能力」だったわけである。その意味で、③これら【指摘】や【非難】は、相手の能力を認めうるという意味では同調的な行為であると考えられるのである。

そのような意味で、このような断片は、単に相手の主張を【非難】【指摘】するような否定の「それは違うんじゃない」や「あなたは間違っている」等の発話ではない。むしろ、相手の能力の欠如を規範的に良しとしない形での【非難】や【指摘】なのである。その差異は、相手の能力を認めるか否かにかかわっており、雑駁にいえば、その人をどう傷つけないか、などに関わる対人調整的な行為でもあると予測できる。

以上の 2 タイプの断片の分析から、記憶の心的述語は、記憶と連続する様々な概念をその場の行為の要請に従って、連鎖に沿って体系的にレリヴァントにしていることを示すこともできた。その意味で、記憶概念にかかわる心的述語は特定の行為を行うための公的で相互行為的な資源であると例証できただろう。

引用文献

<和文>

浦野茂(1999)「想起の社会的コンテクスト」 現代社会理論研究(9), pp.109–21.

浦野茂(2007) 「記憶の科学 : イアン・ハッキングの「歴史的存在論」を手がかりに(記憶の社会学)」 哲學(117), pp. 245–66.

千々岩宏晃(2015)「日本語の雑談での「あなたに関する知識を示す発話」の会話分析を用いた研究 : 発話末の下降調の「ジャン」に着目して」 日本語・日本文化研究(25), pp. 78-89

西阪仰(1997) 『相互行為分析という視点』金子書房

西阪仰(2001) 『心と行為』岩波書店

西阪仰(2005)「複数の発話順番にまたがる文の構築—プラクティスとしての文法 II—」, 串田修也[他][編]『活動としての文と発話』, ひつじ書房, pp.63-89

前田泰樹(2008)『心の文法:医療実践の社会学』, 新曜社

<英文>

Coulter , Jeff.(1979) *The Social Construction of Mind.* Macmillan (=1998. 西阪仰[訳] 『心の社会的構成』新曜社)

Hacking, Ian (1995) *Rewriting the Soul,* Princeton University Press

Lynch, Michael and Bogen, David (2005) '"My Memory Has Been Shredded": a Non-Cognitivist Investigation of "Mental" Phenomena'. *Conversation and Cognition* pp.226–240.

MacWhinney, B. (2007) "The TalkBank Project" J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl eds., *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases,* Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.

Ryle, Gilbert (1949) *Concept of Mind* , Hutchinson's University Library (=1987. 坂本百大[他][訳] 『心の概念』みすず書房)

脚注

[1] 本稿で「結びつく」というときには、記憶概念と、各々独立した他の概念との連続的な横関係を示している。それは、局所的な状況に合わせて利用され、上下関係、全体-部分関係であるとは考えていない。ただし、Coulter は、4 番の知識のネットワーク性に関するものがほとんどを占めるだろうと予測している(1979=1998, p. 120)ものの、ここで一覧にしたものを体系的に整理した研究は見られない。

[2] 換言すれば「思い出したことに対する他者からの指摘が可能である」ということから、想起が単なる機械的な作用であるというよりは、社会的なものであるという主張だ。

[3] 特に 6、7 に関しては、Coulter(1979)は実例等を出しているわけではないために、ここでは引用者が補完的に述べている。そのため、Coulter が必ずしも意図したものではないかもしれない。

[4] 文字起こしでの転記記号は西阪(2005)が収録されている『活動としての文と発話』、xi-xix 頁に表された Jefferson 方式のものを参照。本稿での特殊な記号として、本稿では行為を【】印によって表記した。

[5] この位置に「その子シンディーっていうんだけどね」等の根拠が来ることが不自然ではない。

[6] ただし、Okm は、かわいい女の子であることと、名前の必要性について、別の規範を持っていることが観察可能だ。実際に、そのかわいい女の子の名前を提供しようと試みる Shin の様子(018 行目)を、女の子への執心を表すかのように 019 行目で笑っている。

[7] 「サブリナ」はハリソン・フォード主演のコメディ。1995 年 12 月公開。オードリーヘップバーン主演の『麗しのサブリナ』のリメイク。

[8] Lan のこの用法は、前項で述べた自らの能力の欠如を述べる用法には当たるかどうかは、議論の余地がある。008 行目に対する【同意】の第二連鎖成分(Second pair part)であり、出現位置が異なるからだ。